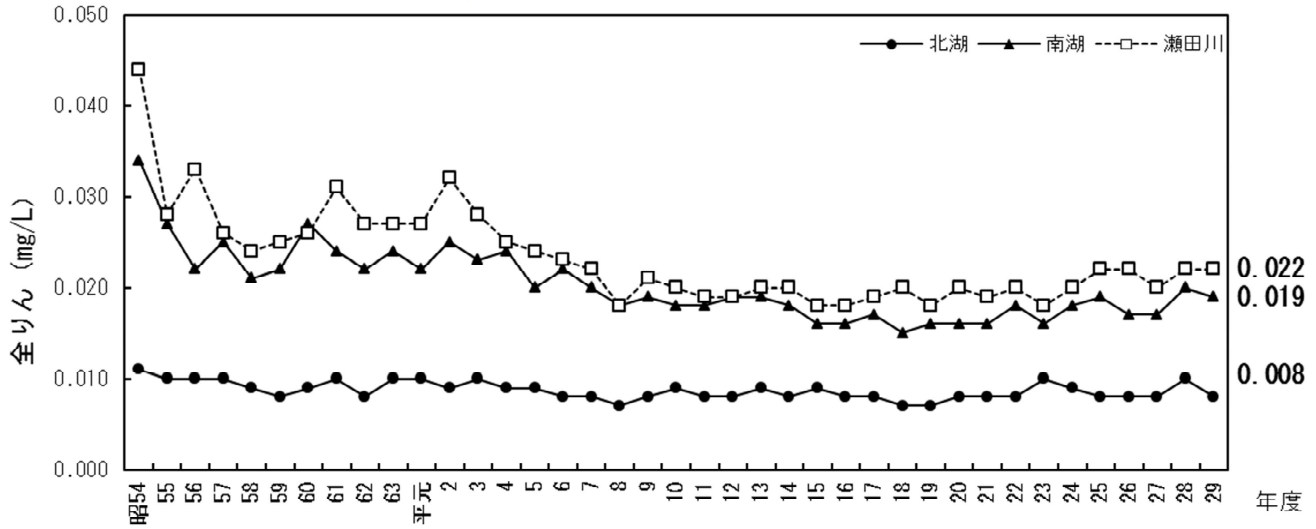


⑦ 全りん (T-P)

北湖の全りんは0.008mg/Lと前年度より低く、過年度並みだった。

南湖の全りんは0.019mg/Lと前年度並みで、過年度より少し高かった。

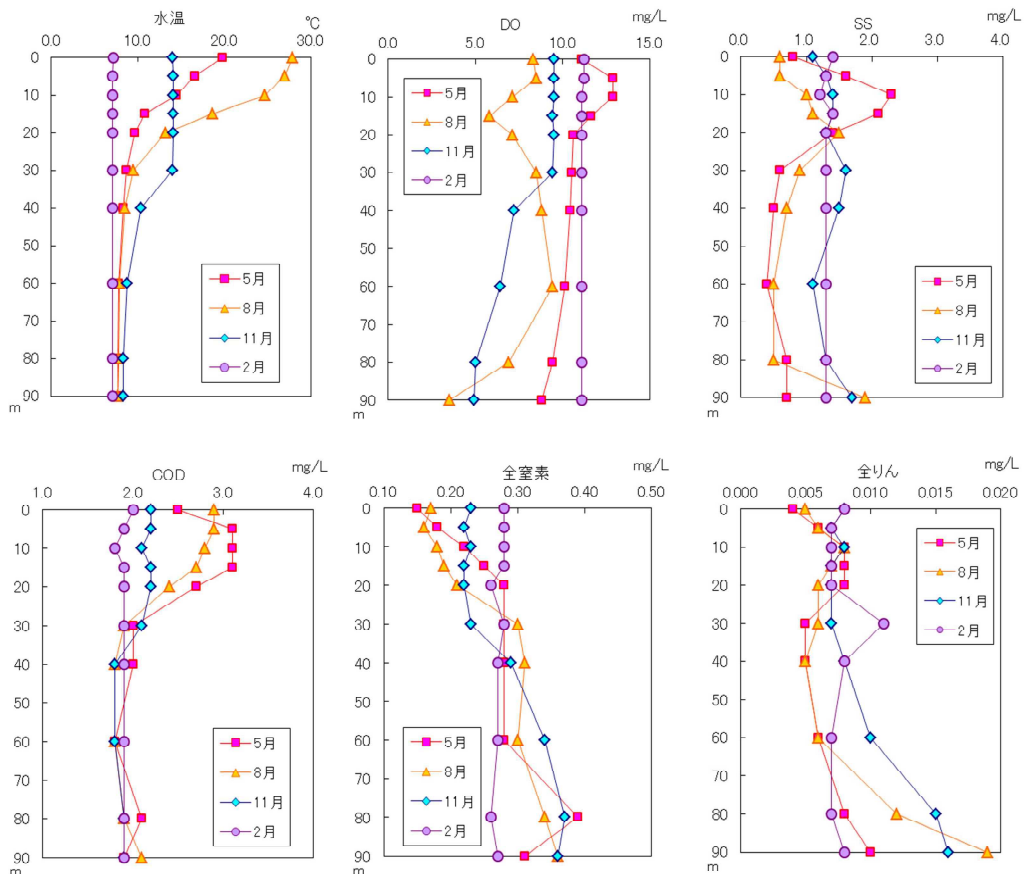


2. 琵琶湖水深別水質調査結果について

琵琶湖の鉛直方向の水質調査は、北湖3地点、南湖2地点で調査を実施している。ここでは、今津沖中央の調査結果をもとに評価を行った。

(1) 今津沖中央（水深約90m）における水深別水質調査結果の概要

春季から表層水温が上昇し夏季に水温躍層が形成された。その後、秋季の気温の低下に伴う表層水温の低下により水温躍層が徐々に衰退し、平成30年1月22日の調査時に過去10年の中では最も早い時期に全層循環が確認され、表層から深層部まで水温やDO等の値が均一となった。



【北湖における鉛直方向の水質について】

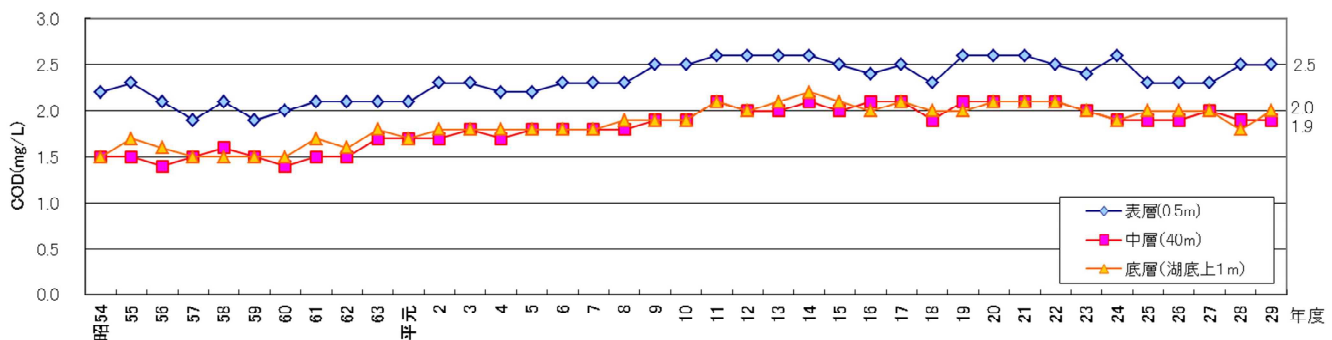
例年5月頃から、表層の水温上昇により水温躍層が形成され、上層と下層の水の対流が無くなるため、下層のDOは徐々に低下する。この時季から表層では植物プランクトンが増え、窒素を利用して有機物を生産し、それらが沈降することにより、表層の窒素が減少する。また深層部では、表層から沈降した粒子の分解に溶存酸素が消費されるほか、窒素やリンの濃度が上昇する。

秋以降の気温の低下とともに、表層水が冷却され重くなることによって循環が起こり、深層部へ酸素が供給される。2月頃には、表層から湖底まで湖水が循環し、各水質項目も表層から深層部まで均一となる。

(2) 今津沖中央（水深約90m）におけるCOD、全窒素、全リンの水深別の経年変化

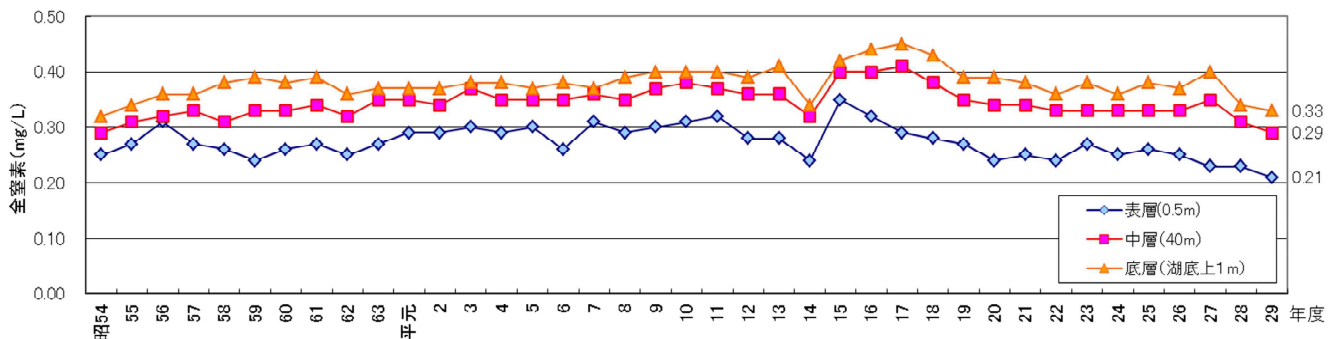
① COD

表層は過年度より少し低く、中層および底層（湖底直上1m）はここ数年低下傾向にある。



② 全窒素 (T-N)

全層で平成15年度以降は減少傾向、平成20年度以降は横ばいの傾向にある。



③ 全リン (T-P)

表層と中層では横ばい傾向で推移しており、底層（湖底上1m）では変動が大きい、近年やや増加傾向が見られる。

